

# 公共圏、アンタゴニズム、 そしてジャーナリズム

## 早稲田大学最終講義

1 誰に向けて話すのか、話をするお前は何者か

「最終講義」という場で何をお話するのか。タイトルは取りあえず決めてはいましたが、それよりも話をする時にはスタンスを決めなければならず、それはどういう人々に向けて話すのかで変わってくるものです。では、この「最終講義」ではどのような人々を前に話をするのか。決して「最終講義」ではなく多様でしよう。的が絞れません。そんなことを考えていたら、何を話したらいいかわからなくなってしまう。授業の講義でもないし、学会報告でもないし、学術講演会でもないし……。ただ、私に何らかの形で関わりがあった方々が来られていることは確かでしょう。そこで三日前に考えました。みなさんには、いずれにせよ「大学から引退するとき最後にお前の話を聞くのではないか」という関心事があって、その共通点以外では多様なバックグラウンドと関心を持っておられる、そういう方々を前にして、結局私はみなさん

とか学者とか呼ばれることには違和感を持ってきました。自分からはそういう言葉は使いません。私の自己認識はWissenschaftlerなり Sozialwissenschaftler であり、このドイツ語が私には一番ピッタリきます。訳せば、科学者、社会学者となるでしょうが、語感がちょっとズレます。どうしてもこれをドイツ語で言わなければならないのは、私が一九七五年に西ドイツに渡って二〇代後半からそこで過ごした一年数カ月のうちに、自分は何者であるかという自己認識をドイツ語によって、そしてドイツ語と格闘しつつ、苦勞して獲得したからです。片道切符で日本を脱出して、主観的には西ドイツに「亡命」して、日本に帰る場所もなく、西ドイツで自己形成をしていくほかなかったため、そうになりました。今でも私の頭のある割合はドイツ語によって占められ、その建て付けで動かされているところがあります。結局、私はWissenschaftlerであり、私の仕事とは Sozialwissenschaftlerとしての「わが仕事」だということなのです。

本日のお話のタイトルはキャンパスの立て看では三つのキーワードが並べられているのですが、それは省略形であって、本当のタイトルは「公共圏におけるアンタゴニスティックな文化的実践としてのジャーナリズム」です。

## 2 公共圏論の八年間

私の理論的バックボーンはドイツのフランクフルト学派にあります。別名では批判理論。それに魅力を感じて西ドイツ

「わが仕事について語る」というスタンスでお話することになりました。普通、「講義」ではそういう話はしないのですが、今日は例外としましょう。

ドイツの大学では講義を Vorlesung と呼びます。学生の前で原稿を読むという意味です。教授は今考えていることをマニスクリプトにしてそれを学生の前でひたすら読みます。そして、質問を受けずにさっさと帰っていきます。そのマニスクリプトがやがて出版化されて本になったり、弟子が筆記していたものがちに本になったりします。私は普段の講義では原稿は用意せず、パワーポイントを使って進めますが、今日は原稿を用意しました。それは、最後の講義であらぬことをしゃべったらマズイと思ったからです。

「わが仕事について語る」というとき、では、その仕事なるものはどのような属性の人間によってなされたものなのか。つまり自分の仕事について話をするお前は何者なのだということを片付けておかなければなりません。私は自分を研究者

に渡ったのですから当然のことと言えます。一九八六年に事情あって日本に帰ってからしばらくして、私は公共圏という概念に関わる論文を書き始めました。一九九〇年秋に書き、翌年刊行された論文「空間概念としての Offenlichkeit」ハバーマスにおける公共圏とコミュニケーション的合理性」を皮切りにして、その後まるで「注文の多い料理店」のようになって、注文内容を自分の関心方向に引き寄せつつ公共圏関連論文をハイペースで生産していききました。それらの論文を収録して、一九九六年と一九九九年に単行本を出版しました。この仕事は九〇年代のほぼ八年間で終わりました。もうそれ以上新しく書くことがなくなりました。

公共圏について書き始めた動機は、ドイツでは日常的にもメディア上でも学術的にも頻繁に使われる言葉であり、またそれなしには語りを構成できないような言葉である Offenlichkeit という言葉、それに相当する日本語が日本にはあるのか、ないのではないかと疑問でした。日本語ではそれに相当する言葉なしにどうしてやっていけるか。その言葉と概念がないことによって、社会や政治のあり方にどういう影響があり、どういう帰結が生まれるのか。もちろんこれは逆のことも言えます。日本語の「世間」とか「無常」とかドイツ語に翻訳できない言葉もいろいろあります。

Sozialwissenschaftler として私は、その Offenlichkeit を空間の概念であると捉え、それに「公共圏」という訳語を与え、その概念を装置として使って、メディア、コミュニケーション

## 花田達朗

はなだ・たつろう 一九四七年、長岡県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。ミューンヘン大学大学院博士課程修了。東京大学大学院情報学専攻、学振員を経て、二〇〇六年より早稲田大学教育、総合科学専攻教授。二〇〇七年より同大学ジャーナリズム教育研究所長。二〇一五年よりジャーナリズム研究所所長を務める。二〇〇八年三月迄連任。専門は社会学、メディア研究、ジャーナリズム研究、ジャーナリスト養成教育も行ってきた。主著に「公共圏」という名の社会空間（公共圏、メディア、市民社会）（木曜社、一九九六）、メディアと公共圏の成り立ち（中公、二〇一〇）、東京大学出版会、一九九九、など。二〇一八年二月より「花田達朗ジャーナリズム・ムコレション」（全七巻、彰文社）刊行開始。

ン、情報、ジャーナリズムなどに関わる社会現象を観察、理解、説明、解釈、記述するという仕事をしてきました。その際、私の関心にあったのは「パブリックなるもの」(公共)の発生と存立でした。それはプライベートな領域ないし生活世界における私人たちのインタレストから出発して、それが権力との交渉関係に入るときに形成され、浮上してくるものと捉え、その「パブリックなるもの」の行為と関係が展開される舞台、すなわちひとつの社会空間を公共圏と捉えました。したがって公共圏は国家に向きあって対峙しているという構図の中に描かれます。その交渉関係のなかで公共圏では、対外的には国家に対する「言論・表現の自由」の権利の主張が、対内的には自分とは異なった他者の言論に対する寛容な態度と連帯の規範が掲げられていくこととなります。

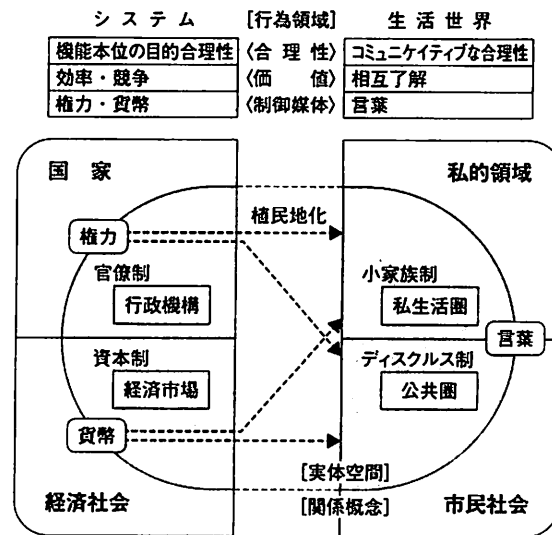
### 3 「システムによる生活世界の植民地化」と脱植民地化闘争

私にとってハーバーマスの議論で印象的だったのは、「システムによる生活世界の植民地化」という命題でした。これは一九八一年、私がまだ西ドイツにいた頃に出版された『コミュニケーションの行為の理論』で打ち出されたもので、現代世界の基本的な矛盾が発生する構図を説明しようとするものでした。お手元の図をご覧ください(下図参照)。なぜ現代社会の矛盾が生まれるのか。ハーバーマスはまず現代の社会構成体を一方に国家行政機構と資本主義市場とから成る「システム」、

のだと説明します。そのような事態を彼は生活世界が「システム」によって植民地化されると表現したわけですが、植民地化の事態をどうするのか。彼の処方箋は公共圏と親密圏のチカラを強めて、植民地化圧力を押し返そうというものでした。それを担うべき公共圏の主役はアソシエーションです。個人の自由意志に基づく連合組織であり、「新しい社会運動」のNGOやNPOということになります。マスメディアが改革されるといふ展望が立たないなかで、権力化したマスメディア、広告産業の一角でビジネス化したマスメディアにはもはや公共圏のインフラ機能を期待することはできません。「システム」の側へ入ってしまったからです。

この植民地化命題は、繰り返しになりますが、一九八一年のもので、その本は日本では一九八五年から翻訳の出版が始まりました。また東西冷戦の真っ最中、欧州でパーシング2とSS20の核ミサイルが向きあって発射台に並んでいた時代です。時計の針は核戦争五分前を指していました。そして、予想外の一九八九年のベルリンの壁の崩壊、それを勝利だと捉えた「西側」はそれ以前から始まっていた新自由主義の傾向をさらに強め、新自由主義のグローバル化を強力に進めます。その状況のなかで、植民地化命題に立つならば、アソシエーションによる脱植民地化闘争と呼ぶべき闘争が必要だったと思います。あるいは植民地解放闘争と言っても同じことだと思います。「押し返す」というのでは受け身で、自己防衛的で、弱すぎます。「システム」自体はそのまま放置され、傷つかずだか

図 (関係概念—実体空間)構図から見た「システムと生活世界」の二元構造



出典:花田達朗「公共圏という名の社会空間—公共圏・メディア・市民社会」木鐸社、1996年、171頁。

テム」、他方に私的生活の領域(または親密圏)と公共圏とから成る生活世界という二元構造で捉え、それぞれに異なるそれぞれ合理性原理を説明していきます。そして、それら二つの領域が無関係に存在しているのではなく、「システム」の側の目的合理性という価値(効率と競争)が権力とお金というメディアウム(媒体)に乗って生活世界の中に入り込んできて、そこに存在する別の合理性、コミュニケーションな合理性の価値(言葉による相互了解)を侵害し浸食し破壊している。そのため、生活世界のなかにさまざまの病理現象が生まれる

らです。「システム」によって植民地化された生活世界をその状態から解放するためには、対抗的な力で「システム」を変えていく戦略が必要でした。しかし、私は九〇年代の私の公共圏論の八年間でそのような明確な戦略を持った公共圏論を書くことはできませんでした。振り返れば、概念の解釈とその解釈の切れ味をみる試し切りばかりをしていました。

### 4 カルチュラル・スタディーズから表現者の文化的実践と教育の実践へ

他方、一九八六年チェルノブイリ原発事故発生の直前に西ドイツから帰国後しばらくして、私は英国の学術界との関係を持ち始めます。シンクタンクの仕事でウェストミンスター大学教授のニコラス・ガーナムと知り合って以降、彼によって英国のメディアスタディーズの人々に次々に紹介されていきました。ガーナムは英国においてOrenthlicher概念を基にしたPublic Sphere論の先駆者で、サッチャー政権下の英国におけるパブリックの危機を問題にしていました。私はテレコム政策の欧州シンポに招聘されて、そのチェアをしていた彼に会ったのですが、一発で意気投合しました。彼はドイツ語でハーバーマスやハイデッガーを読み、フランス語でブルデュエーを読んでいた。私はガーナムのおかげでカルチュラル・スタディーズの人々とも知り合いになりました。ベルリンの壁崩壊前後の英国のインテレクチュアルズは面白かったです。私の交流はその後、東大時代にはブリティッシ

ユ・カウシルが経済的にサポートしてくれました。

そして、途中をちょっと省略しますが、一九九五年二月にロンドンでステュアート・ホールに会って、東京に来てほしいと説得し、一年後に東京でシンポジウム「カルチュラル・スタディーズとの対話」を開催する同意を彼から得ました。その後一年間の死にも狂いの準備でなんとかその開催に漕ぎ着けました。ホールを含めて六人のスカラーを成田空港に迎ええました。しかし、その四日間のシンポの結果と経験は私の思い描いていたものではありませんでした。また、参加者たちから私は主催者として批判も受けました。私には理解できない批判でした。同時通訳は、サイマル・インタナショナルが長井鞠子さんを団長とする、日本最強の通訳団を送り込んでくれました。私はイヤフォンで両方の言語を聞いていましたが、実に見事な努力であり、神業の通訳でした。しかし、翻訳の問題は英語と日本語の問題ではなく、むしろ日本語のなかでの問題でした。多くの参加者は自分の言いたいことだけを言っていて、他者の言葉には耳を傾けてはいませんでした。カルチュラル・スタディーズについて語ろうとしているのにカルチュラル・スタディーズ的ではありませんでした。翻訳と対話の土壌は見られませんでした。

私は少なくとも日本では二度とカルチュラル・スタディーズには接触しないと決めました。もう懲り懲りだと思えました。しかし、私自身はカルチュラル・スタディーズから離れたわけではありません。深く潜っただけ、潜行しただけです。

とにしました。長らく日本のメディアやジャーナリズムを制度的に分析してきましたが、その機能不全の原因にプロフェッショナルリズムの欠落があるということがわかったときにどうするか。首飾りにミッシング・リンク（失われた環）があるからつながっていかないのだということを知ったときにどうするか。それを指摘しただけで放置しておけばよかったのに、その欠落したものを作り出そうと考えてしまいました。どうしてそう考えてしまったのか。それはカルチュラル・スタディーズからの声が聞こえてきたからです（もちろん日本のそれではなく、私の頭の中のそれ）。文化的実践者を育成するという文化的実践への誘いです。同時に、それは「パブリックなるもの」を生産する公共圏プロジェクトの一環でもありました。このようにして、私の場合、制度論とカルチュラル・スタディーズの合流したところに「ジャーナリスト養成教育」は成立したのです。

## 6 「トロイの木馬」作戦

こうして、私は東大で二〇〇〇年ころから平たい表現で言え「ジャーナリスト養成教育」なるものに加担していくのです。それを裏側で「社会的・文化的表現者の実践プログラム」と呼んでもよかったです。そこにはもちろん大きな試行錯誤と紆余曲折がありました。そして、やがてある人の他界が理由で、その人の遺志を継いで「ジャーナリスト養成教育」をやってほしいと、早稲田大学に呼ばれることになり

種明かしをすれば、カルチュラル・スタディーズの看板を立てずに黙ってカルチュラル・スタディーズを実践することにしたのです。writing cultural studiesではなく、doing cultural studiesということ。ジャーナリストを文化的実践者、社会的表現者として捉えて、その養成と教育という実践をカルチュラル・スタディーズ的にやっていくということです。私はそれ以前からの公共圏論においてはジャーナリストを諸力の錯綜し葛藤する公共圏の耕作者、そして工作者として位置づけてきました。それを一歩進めて、耕作者および工作者の実践そのものを問い、私自身の実践も問うということになります。問題はどのようにして既成の、自明視される、見えない境界を越えていくかということでした。

お手元の資料は、私がジャーナリズム研究所のウェブサイトに二〇一四年二月に掲載した私の文章で、ステュアート・ホールの逝去を私的に悼んだものです。

## 5 制度論からプロフェッショナルリズム構築とジャーナリスト養成教育へ

もう一つ、私をいわゆる「ジャーナリスト養成教育」へと向かわせた要因に、制度論者としての帰結ということがあります。翻訳がないので日本では有名ではありませんが、ドイツでは有名な社会学者にヘルムート・シエルスキーがいます。彼の「制度の理論」に影響を受けて私は考え、制度のなかに価値システムを置くことから出発し、制度の機能論に立つこと

しました。それは二〇〇五年秋の出来事で、二〇〇六年四月から私の早稲田での一二年間が始まります。独立したジャーナリズム大学院を全学一致態勢で作るという構想の提案書を大学執行部に提出しましたが、結局のところ大学ポリテクスのなかで敗北し、私の構想は挫折し、その可能性からは手を引きました。いま政治学研究科ジャーナリズム・コースというのがあって、ジャーナリズム大学院と名のつていますが、私とはまったく関係ありません。しかし、大学院ではなく学部学生のほうでは、「全学共通副専攻ジャーナリズムコース」の仕組み作りが事務職の協力もあって首尾良く進み、カリキュラムを継続的に改善し、ティーチングメソッドを実験・改良し、教科書や事典の出版もしてきました。

学生たちに、私は「これはトロイの木馬作戦なのだ」と語ってきました。この人材養成教育は日本独特の体制、いわゆる「マスコミ」への人材供給のためでもないし、ガラバゴス化した「マスコミ」の延命に手を貸そうとしたわけでもありません。ジャーナリズムとは「マスコミ」ではない、これが学生への最初の呼び掛けでした。「ジャーナリズムとは何か」「ジャーナリストとはどのような職業か」を原理的・実践的に理解し、そのミッションを引き受ける覚悟のある人間を木馬に乗せて、その木馬を城門から中を通して「マスコミ」にプレセントし、城内に入った彼ら・彼女らが闇夜に乗じて木馬から出て、その城内を作り変えていき、やがて連帯してそこにジャーナリズムを実現するという作戦。そうした

若者たちによってジャーナリストの疎外形態としての「マスコミ」体制を作り直し、ジャーナリストが主人公になれる世界を形成するという作戦。日本の公共圏の活性化を公共圏の耕作者であり、工作者たるジャーナリストに託すという作戦。そういうことでした。いま会場を見渡しますと、トロイの木馬の戦士が何人もいらっしやいます。遠くからたくさん来られていますね。お元気でしようか。

### 7 作戦の限界と不調

しかし、この作戦も今日では以前より大きな困難に直面しています。明らかに曲がり角です。あるいはすでに曲がり角を曲がったあとだと言えるかもしれません。つまりこの作戦の有効性そのものが疑われる状況なのです。一つは学生を送り出す先のメディア企業の状況が一層悪化してきていて、もはや有為の若者を送り出すには値しないのではないかと考えざるをえない段階にきたということです。送り出した学生諸君はメディア企業の矛盾した現実の中で大変苦労しています。志を持っているからこそ、逆に軋轢に遭遇して苦労しています。苦労にも限界があります。そういう卒業生たちと話していると、メディア企業・組織の現場は人間破壊工場かと思うほどです。私は彼ら・彼女らのために、私の戦士たちのために怒りたい。彼ら・彼女らに城を明け渡せと。

もう一つが今日の学生のジャーナリズムへの関心の低下です。私たちが呼びかけ、語りかける母集団の数が激減してきています。私たちが呼ぶかけ、語りかける母集団の数が激減してきています。私たちが呼ぶかけ、語りかける母集団の数が激減してきています。私たちが呼ぶかけ、語りかける母集団の数が激減してきています。

「ティーチング・アワード」を受賞しました。大学から褒められたわけです。廃止を決めた後に褒められるとは、皮肉なものです。褒めるならもっと早くしてほしかった。

### 8 二のバックラッシュの時代に

状況は深刻です。ジャーナリズムが相手とする世界の社会的現実はこの三年くらいで決定的に悪化しました。それまでとは違う次元に入ったように思います。世界各地で権威主義政権や独裁政権が誕生し、デモクラシーは大きく後退しました。政治権力は粗野で粗暴で野蛮になり、平気でウソをつき、言葉への信頼を破壊し、厚顔無恥になり傍若無人になりました。歴史が逆回転しているかのようです。

日本も例外ではなく、二〇一二年二月の衆院選挙の結果成立した安倍政権(第二次安倍内閣以降)は従来の保守主義政権とは違い、権威主義的政権だと言うことができます。その憲法理解、メディア理解にそれがよく現れています。安倍首相の発言や自民党憲法改正案を見れば、憲法とは「国の形を決めるもの」であり、国民や家族に指針を与え、義務を課し、「縛るもの」と考えられています。憲法とは「市民社会と国家の間の統治契約書」ではなく、つまり統治機構としての国家がその統治においてしてはならないことをあらかじめ定めて国家を「縛る」契約書ではなく、国家が「国民に与える

たということです。私の印象論ではなく、データでお見せしましょう。お手元の表は、コア科目「ジャーナリズム概論」の履修者数の推移です。この場にはこの科目を履修した卒業生も多くいらっしやるようです。以前は約五〇〇名いた履修者は昨年約一〇〇名となり、ほぼ五分の一になりました。この激減には何が影響しているのでしょうか。よくわからなところもあるのですが、答えはおそらくこれではないのか。今日の学生たちにとってジャーナリズムの現状、いやその目に映っている「マスコミ」の現状はぜんぜん魅力的には見えないのです。ワクワクしたり、スリリングと感じたりする対象ではないのです。メディア・プロダクトの現実にはそのようなものを感じる機会はほとんどなく、記者クラブや斜陽産業などの問題ばかり指摘される状況なのですから、仕方ありません。ただそれだけではないような気がします。学生たちの関心事が根本的に変わったのではないか。ただ、それは多数派学生の話であって、もちろんそうでない少数派はまだ若干いることを否定はしません。

「トロイの木馬」作戦は大きな限界に達しました。私は個人的には、今までと同じことをやっていくことに意味はあるのか、ないのではないかと考えるに至っています。ちょうどそのときに私は大学を去る年齢に達し、自動的にこの作戦から引退することになりました。昨年春学期に行った「ジャーナリズム概論」が最後で、その科目の歴史に幕を閉じ、廃止とすることにしました。それなのに、この一月、その科目は「書」であり、国家の意思を国民に伝える書なのです。近代以前の認識だと言わなければなりません。また、安倍自公連立政権にとって、メディアとは政府の広報媒体でなければならず、政府活動に協力すべきものと考えられています。「政府の透明性」という課題、すなわち税金で行われている政府活動の内容を納税者に公開してアカウンタビリティを果たすという課題への理解は見られず、したがって政府活動で発生する情報の公開・開示の義務やメディアがもつべきジャーナリズムの権力監視機能への理解も見られません。

問題は、こうした権威主義政権が議会多数派の自公連立のもとで合法的に生まれたものであり、有権者の多数派によって支持されているということです。まさにエーリッヒ・フロ

## 岩波ブックレット

# 3・11を心に刻んで 2018

岩波書店編集部編

大震災のあと、二〇一一年五月に始まったウエブ連載「3・11を心に刻んで」は、約二五〇名の筆者により毎月書き継がれてきました。本書にはその第七期、および「河北新報」による女川レポート「復幸の設計図」を収録します。

本体780円(税別)

岩波書店

ム」の著書の書名にいう「自由からの逃走」です。国家を縛る憲法ではなく、国民を縛る憲法を制定しようとする政権をそれを知って支持する有権者とは、精神的に言えば、自由を放棄し、権威に服従し、国家と一体化することを自分から望むマソヒズムの集団だということになります。私は新入生の社会科学入門の授業ではここ数年、最初に吉野源三郎『君たちはどう生きるか』(昨年、漫画版の刊行でリバイバル)を、中間あたりで高島晋哉を、そして最後にそのフロムの本を読ませ、議論してきました。学生諸君を奴隷にさせないため、教え子には奴隷になってほしくないからです。「諸君はこの時代に強いられ率ゐられて 奴隷のやうに忍従することを欲するか」(宮沢賢治「生徒諸君へ寄せる」)。

経済権力も、ITやパブリック・リレーションズで化粧はしているものの、その裏で野蛮な活動をシステムティックに行っています。「経済成長」というとつこの昔に終わった神話を今も語る安倍政権との二人三脚で、自国では破綻した原発技術をほかの国の権威主義政権と話を付けて輸出したり、政府に武器禁輸原則を外してもらって武器で商売しようとして、最近のリニア談合事件にも見られるように透明な経済活動から遠い利潤の上げ方を追求しています。さまざまの不正な、アンフェアな利潤を一体誰の犠牲の上にあげようとしているのでしょうか。他者を犠牲にした「経済成長」で一体誰が利益を得るのでしょうか。日本の民衆ではありません。

に奴隷に一步近づいていると言えるでしょう。いまや生活世界の脱植民地化闘争、植民地解放闘争では時間的に間に合いません。そのような大きな設定よりもっと手前ところで、具体的な奴隷解放闘争を考えるべきではないかと思えます。

このバックラッシュの時代に、グローバルにもナショナルにも展開している政治権力・経済権力・社会権力が必然的に産み出す不正や腐敗や悪事や不作為、つまり不正義の犠牲者(victim)こそを中心化してものを観察することが最も直接的で明快で分かり易い方法だと思います。そこに登場したのが二一世紀の探査ジャーナリズム(Investigative Journalism)とそのグローバルな対抗運動です。それがジャーナリストたちによる国境を越えたムーブメント(運動)だという点、そして現代世界の矛盾とそれを生み出す原因になっている力に抗う構えを持っているという点、これが重要です。その探査ジャーナリズムは、私の解釈では、矛盾の原因である権力の監視をミッションとしつつ、権力に対する対抗的で論争的で非妥協的な認識と活動、つまりアンタゴニズムを中心に置いています。もう一つ、探査ジャーナリズムが中心に置くのが、ジャーナリスト個人の主体性です。犠牲者を救済し、奴隷を解放するという立ち位置を主体的に選択し決断するのは個人です。その個人にしてはじめて、権力側が作成し、当たり前のものであるかのような顔をして流通していくオフィシャル・ストーリーに対して、それを突き崩す別のストーリーを作成し、

9 奴隷解放・犠牲者救済と探査ジャーナリズム

いまこの国にも見られる、政治権力・経済権力・社会権力の野蛮化のなかで何が起きているか。キーワードは奴隷(slave)だと思います。奴隷制は遠い過去の話ではありませんし、どこか遠い国の話でもありません。現代の奴隷制は至るところにあります。なぜなら権力作用は至るところにあるからです。

「過労死」という言葉は国内でそれまで注目されなかった事態に名称を与えることで問題を顕在化する役割を果たし、「karoshi」は外国の常識では理解されない事態に国際的な記号を与えました。しかし、いまやその言葉は再考されるべきかもしれません。その言葉はあたかも労働する身体の側の許容程度の限界という表現を採っていますけれども、本質は企業に奴隷の死です。奴隷とは自由を剝奪された者たちであり、人間の尊厳が無視された者たちです。その不自由の強制がハードなものであれ、巧妙なソフトなものであれ、奴隷は奴隷です。そして、そこにはさまざまな形態の奴隷がいます。美しく着飾っていて奴隷になっている人間もいれば、汗まみれで栄養失調の奴隷もいます。自分が奴隷であることに気が付くことができないということは、奴隷という言葉によって自分の状況を語る可能性を知らないということなのです。「働き方改革」という言葉が実は「働かせ方改革」を隠蔽する欺瞞の言語であることに気が付くことができないとするなら、すで

パブリックに向かつて発信し提供することができるのです。以上、私たちは、犠牲者の中心化、アンタゴニズム、ジャーナリストの主体性、これら三つから成り立つイニシムを探査ジャーナリズムと定義します。これによっていま「システム」(ハーバードの意味で)の根本を変えるところまではできないとしても、個別の不正義を終わらせることはできるのでないか。このバックラッシュの時代に、これは迫り込まれた上での後退戦と言わざるをえないとしても、ディテールの闘争によって救われる人々はいるはずで、それが一個一個の不正義を潰していくことの効用であり、成果です。抽象的でもマクロ的でも指導者の上から戦略でもなく、個別具体的にミクロ的で犠牲者という当事者の救済から出発すること、そしてその不正義を終わらせること、これが今日の探査ジャーナリストにとっての正義(justice)であり、後退戦におけるバトルに臨む戦士の立ち位置ではないかと私は思います。

10 アンタゴニズムと探査ジャーナリズム

ここで、少しアンタゴニズムについて考えてみましょう。英和辞典には反目、敵対、対立、拮抗などの訳語が並んでいます。語源を見ると、「十九世紀のフランス語で、ant(……に対して) +agon(競技) +ism……: 対し競技を挑む状態」と書かれています(ジーニアス英和辞典)。通常、アンタゴニズムは、たとえば与野党の対立、階級間の対立などのように同じカテゴリーのもの、政党なら政党、階級なら階級同

士の間での対立や敵対関係を言います。双方にあい譲れぬ利害、インタレストがあり、それが衝突している状態です。その対立のなかで野党が与党を負かせば、野党が政権を手に入れ、入れ替わります。階級もプロレタリアートがブルジョアジーを打ち倒せば、権力を握ります。対立において譲歩したり妥協したりすると、つまり自己のインタレストを緩和したり放棄するとアイデンティティそのものが崩れます。アイデンティティを維持するためにはアンタゴニズムを打ち出さなければなりません。この世界には決して解消することのできない違いと対立が存在します。

この通常のアンタゴニズムに対して、私が要請する探査ジャーナリズムのアンタゴニズムはちょっと変則的かもしれません。「権力に対する対抗的で論争的で非妥協的な認識と活動」とはどういう関係でしょうか。権力とジャーナリズムは同じカテゴリーではありません。対抗的な関係ではあるが、ジャーナリズムは権力を敵視しているわけでも、権力に敵対しているわけでもなく、権力に取って代わろうとするわけでもありません。ジャーナリズムにとって権力は「敵(enemy)」ではありません。ジャーナリズムの敵は自分のなかにあります。他方、権力のなかには批判的ジャーナリズムを敵視するものもあります。「教養のある権力」(つまり野蛮でない権力)は仮に批判的ジャーナリズムを煙たい存在だと考えたとしても敵視したりはしません。取って代わろうとする相手ではないと知っているからです。ジャーナリズムと権力は同じ土俵

のです。その際に、犠牲者の無念を晴らすために、権力に対して対抗的で論争的で非妥協的な態度を取ることとは、犠牲者の潜在的なアンタゴニズムに探査ジャーナリストが加担することであり、献血して輸血するようなものです。すなわち権力に対抗的な探査ジャーナリズムのアンタゴニズムとは犠牲者を經由して権力に向かって行使されるのです。それは、権力監視(watchdog)という仕事が、客観的に見れば、ジャーナリズムがみずからの利益のためではなく、市民社会の利益のために行う活動であるという点、市民社会の人々を代行する仕事代理人としての仕事だという点に由来しています。つまり請負人なのです。しかも自分から買って出た請負人なのです。

その意味で言えば、探査ジャーナリズムとは「七人の侍」モデルだと言えるでしょう。一九五四年の黒澤明監督作品です。映画の粗筋を言うのは野暮ですけども、舞台は戦国時代。秩序のない世情で、野武士の盗賊の襲撃に困り果てた村民が村を防衛するために侍七人を雇って闘い、「勝った」という物語です。これは仇討ちとか敵討ちとは違います。仇討ちは主君や親兄弟など自分が同一化した人の無念を晴らし相手に復讐することです。それは封建制の秩序から許容され利用された有縁の原理です。ところが、「七人の侍」はたまたま村民の話聞いて、村民に被害を及ぼす「こいつ等を許せるか」と怒りを覚え、義を見て、請け負うのですが、彼らは村民とは同族ではありません。街道の通りすがりの浪人たちです。縁もゆかりもありません。つまり、無縁の原理で動い

て競技する関係、そういうアンタゴニズムの関係ではありません。ところが、なかには権力と同じ土俵に立って競技に参加しようとする自称「ジャーナリスト」、つまり政治のプレイヤーになって政治を動かそうとする一門もいますが、それは逸脱行為です。政治を動かしたいのであれば、ジャーナリズムに足場を置かず、正々堂々と表玄関から政治の土俵に立って政治家や政党の権力闘争で勝負すべきでしょう。ジャーナリズムから政治を動かそうとするのは密輸業者のようなものです。これが密輸であることがわからない現役記者や記者志望学生は決して少なくありません。

## 11 「七人の侍」のアンタゴニズム

探査ジャーナリズムが権力監視活動を行う理由とは何か。なぜそれを意識的に選んで行うのか。それは、探査ジャーナリズムがその権力に取って代わるといふような敵対的な目的を持っているからではなく、権力活動から必然的に生まれる犠牲者を救済しようという目的を持っているから、その活動をするのです。考えてみれば、権力と犠牲者の関係は統治者と被統治者という一般的な関係において同じカテゴリーの間関係だと言えます。したがって両者の間で原理的にはアンタゴニズムは成立します。しかし、権力と犠牲者という関係、権力行使者と受苦者という関係においては極端な非対称性があり、犠牲者は限りなく無力で、犠牲者には圧倒的に希望がありません。そこで探査ジャーナリストが犠牲者に加勢する

ています。自分たちが義を感じれば、「腹一杯のメシ」と引き換えに、権力を振るう横暴な相手と一戦を交えるというスタイルです。そして、戦いが終わってみれば、「今度もまた負け戦だったな」ということであつたとしても……。そういう「七人の侍」のアンタゴニズムこそ、探査ジャーナリズムのアンタゴニズムではないかと私は思います。共に闘ったのに、共同体に生きる農民たちは勝利し、フリーの浪人たちは敗北するという結末によって、黒澤は何を語ろうとしているのでしょうか。

## 12 社会学臨床教授とワセタクロニクルの出会い

国連人権理事会の特別報告者、デービッド・ケイはその仕事をボランティアでやっていて、本職は米国カリフォルニア大学アービン校の教授ですが、面白いタイトルを持っています。Clinical Professor of Law というのです。何と訳したらいいのでしょうか。取りあえず、法学臨床教授。そして、International Justice Clinic という名の教育研究プログラムの所長も務めています。国際的正義の臨床センターとでも訳しましょうか。そのウェブサイトには組織紹介の第一行目に、「センターの学生たちは、ヒューマンライツの侵害に対するアカウインタピリティに関してアドボカシー戦略の発展と実行のために、国内の、また世界中のアクティビスト、弁護士、外交官、学者、NGOとともに仕事をします」と書かれています。彼が二〇一六年四月に調査のために来日したときに最初と最後



